

盛唐の復古論者・李華の意識変革論

加藤 国安

はじめに

唐の開元・天宝期の文人李華（七一五？～七七四？）といえば、二つの顔を持つ。一つは、安史の大乱期、当時の悪政に敢然として決起、文学改革を掲げた剛直者として、もう一つは、それに挫折した後、仏教に深く帰依していくという顔である。李華の仏教については、これまで一定の成果が報告されているが、文人李華についてはある程度研究はされてきたものの、具体的な作品を掲げての研究はほとんどなかった。そこで、近年「李華の復古論——盛唐人の文学改革」という論文^①を発表したが、李華の作品の一部しか取り上げられなかった。小論では、さらに彼の文学改革に託した思いの本質を探索し、当時の士大夫の間に生じてきた人間理解の根本的な意識変革についても言及したい。

従来、李華への言及といえ、唐代古文復興の文壇や仏教界全体の状況の把握に向けられる中で、唐代古文復興初期の闘士、また仏教と士大夫とを結ぶ先駆者という面においてなされることが大半だった^②。大量の文献の山から、誰と誰がどういう関係で結ば

れているかという相関図を浮かび上がらせることは、たしかに重厚な作業であり、多年の努力により全体の構図は随分見えてきたが、しかし李華という人物の実態はさほどには見えてはこない。原因の一斑は、李華の作品そのものに踏み込まずに系譜論を展開してきたことにある。しかし李華は、その作品にこそ命を賭けたのであり、簡単にやり過ぎことはできぬ相談である。彼は開元・天宝の虚栄の世相に向かい、満腔から竜巻のごとき咆吼を放った。——おれの声を聞いてくれ。おれの闘いに耳を傾けてくれ。——その慨嘆は、今も紙面の檻に幽閉されたままである。遠い彼方から運ばれてくる憂悶の鳴咽、心のきしみ。我々はそれらの諸作に襟を正して正座せねばならない。

李華の諸作を一篇一篇じっくり読むと、政治や文体の改革に対する強靱な意志がみなぎり、その闘争心は沸騰するがごときである。李華の代表作「古戦場を弔う文」を見られたい。その一節「文教は宣ぶるを失い、武臣は奇を用ゆ。奇兵は仁義に異なる有り。…（民の）生けるは（天子より）何の恩かある、（天子の）之（民の意）を殺すは何の咎ぞ」は、天子を直接名指しこそしな

いが、その施政をきびしく指弾する発言である。則天武后を批判した張柬之「姚州の屯戍を罷むるを請う表」の「陛下の赤子をして身は野草を膏^たやしめ、骸骨は帰らず。老母・幼子は哀号して千里の外に望祭（遠望して祭る意）す。国家に於いて絲髪^{しはつ}の利も無し。百姓、終身の酷を受けるに在りては、臣窃かに国家の為に之を痛む」（『旧唐書』本伝）よりも、さらに具体的に戦場の悲惨を述べた作品という評がある（「則推行焉而益暢其旨矣」清・陸以活^{りく}『冷廬雜識』卷三「説用兵之害」『筆記小説大観』続編第六冊所収）。これに加えていうならば、その張り詰めた語調と容易ならざる気配、そして天子を弾劾する激しさにおいて一画期をなすといえるが、李華の全作品を詳細に見ていくと、この特色は右の一編のみに止まらない。

また「古戦場を弔う文」の冒頭部にはいう、「往往にして鬼哭して、天陰^{てんいん}れば則ち聞こゆ」と。これは従来指摘がないようだが、杜甫（七一二～七七〇）「兵車行」の「新鬼は煩冤し旧鬼は哭し／天陰り雨湿うとき 声啾啾」にすこぶる似る。両者は同時代を生きた人物であり、いずれかが影響を受けた可能性がある。

その剛直な生き方の一方で、史書は李華が政治的挫折を経て後、「晚（年）は浮図の法を事とし」（『新唐書』卷二百三 本伝）、「子弟に課して農圃に力め、衣食を贍^{おぎな}（＝補）い、雅に無生の法を修むるを好み、冥寂を以て思慮し、爵禄を視ること形骸とし、遺土と同じうす」（独孤及「檢校尚書吏部員外郎趙郡李公中集序」）と

いう静かな慰藉に平安を求めて終わったと伝える。『新唐書』やその他の李華伝に、これ以上の記述はなく委細は不明だが、それまでの彼の言動との大きなギャップは強い印象を与えずにはない。時代の旗頭だった熱血闘士が、どのようなプロセスを経て仏教に静かな安心を見出ししていくのか、この道筋は明らかでない。李華に関しては資料上の限界は大きい、未解読の作品が少なくないのもまた事実である。なんと言っても、まずは具体的な作品に即しての説明が不可欠なのである。

以下、李華の叱咤に武者震いしながら、開元・天宝期の政治に戦いを挑んだ作品を中心に、彼の内面に迫っていききたい。

一 インモラルを恐れぬ李華——「哀節婦賦」

李華の志節堅固な風貌を、彼の門弟たる独孤及は、前掲「趙郡李公中集序」でこう記す。

公の作は王道に本づく。大抵、五経を以て泉源と為し、情性を抒ぶるに以て諷を託し、然る後に歌詠有り。教化を美わしくし、箴諫を献じて、然る後に「賦・頌」有り。權衡を懸けて以て天下の公の是非を弁じ、然る後に論議有り。記序・編録・銘鼎・刻石の作の若きに至りては、必ず其の行事を採りて以て褒貶を正し、夫子の旨に非ずんば書かず。故に風雅

の指帰、刑政の本根、忠孝の大倫、皆、詞に見わる。時に於て文士は馳驚^{ちきふ}して、颺扇^{ひょうせん}波委^{はい}す。二十年間、学ぶ者、稍く「折楊」「皇華」に厭いて、咸池の音を窺う者、什に五六なり。識者、之を文章の中興と謂う。公、実に之を啓く。

李華は経学を根本として諷諭の作をなし、「天下の公の是非を弁じ」て議論を行い、諸作をものしては褒貶を明らかにし、孔子の趣旨にあわなないものは一切書かなかつた。ゆえにその作品には、風雅・刑政・忠孝の精神が強く反映されてくる。当時、文士たちは(乱れた政治に)奔走させられ、暴風雨にあおられ波間に浮沈する状況に陥っていた。世はこの二十年ほど、「折楊柳」のごとき抒情豊かな楽曲や、「皇皇者華」のごとき流麗な詩文に包まれていたが、ようやくそれに飽きるようになり、最近では古代的礼節を帯びた「咸池の楽」(のごとき文学)に心を寄せる者が五六割になってきたのである。識者はこれを文章における中興と評した。それは李華がその端緒を開いたのだという。まさに筋金入りの剛直の文人、そして古文復興の先駆者だった。

大唐の絢爛な花が咲き誇る世だったが、李華はその根っこに腐敗しきった深刻な事態が積もり積もっていることを憂慮、破綻直前の危機と認識し、舌鋒鋭く「天下の公の是非を弁」じたのである。しかし、それがどんな作品においてなのか、また彼が何を主張したのかについて、具体的なことはあまり知られてこなかった。

盛唐の復古論者・李華の意識変革論(加藤)

た。そこで前稿で、「鶚の狐を執うる記」「材の小大」「国の興亡」などを中心に、その「褒貶」の徹底ぶりを論じた次第である。その寓話性や話柄は、同時代人・杜甫の「義鶻行」「瘦馬行」によく似ており、李華の陰影を何ほどか見出すことができる。これ自体子細に検討すべき興味深い問題だが、それは今は置いておき社会に対するより本質的な意識の面において考えるに、例の杜甫の「窮年 黎元を憂え／嘆息すれば 腸内熱す／浩歌 弥いよ激烈なり／放歌 愁絶を破る」(「京より奉先縣に赴く詠懷五百字」)、「悪を嫉んで 剛腸を懷く」(「壯遊」)、「賊臣惡子 紀(律)を干すを休めよ／魑魅魍魎 徒為なるのみ」(「荆南兵馬使太常卿趙公が大食刀の歌」)などと同種の悪を告発する強い言説性を彷彿させる。ここに、安史の乱下、悪を憎んで愁絶を破るがごとき文学をものした一文豪の姿が浮かび上がってくる。

李華にはたとえば、次のごとき衝撃的な作品が見られるが、従来、そのモラリストぶりが注目されたことはなかった。

「哀節婦賦」(『全唐文新編』卷三一四 吉林文史出版社 一九九九)

武康尉の薄自牧^{はくじぼく}、嘗て余に謂いて曰わく、「僕に賢女有り。江陰尉の鄒待徴^{すんないちよう}に適^{とつ}ぐ。徴も亦た良士なり。僕、之を志^{しる}さんと。鄒の子、孤立し、時に古人無く、誰か復た之を知らん。余嘗て其の言を記す。江左の乱に及び、待徴印を解いて竄^{のが}

れ匿る。其の妻 盜の驅る所と為り、將に之を辱しめんとす。妻 密かに待徴の官告(辞令書)を以て村媼に託付し、待徴を尋ねて焉を付さんとす。而して后に死に就く。嗚呼、喪乱より以来、士女 貞烈を以て殆うく斃れる者衆し。余 尽くは之を知らざるも、薄氏の若きは其の父と遊び、其の声義の江南を動かすを聞けり。又 焉くんぞ之を賦せざるを得む。命じて「節婦を哀しむ賦」と曰うと云うのみ。

昔歳、群盜並び起き海浙を横行し、江陰の万戸、化して凝血と為る。蘭の焚かざる無く、玉の折れざる無し。我我たる薄媛、淵然たる明節。自牧の子、待徴の妻よ。玉の徳、蘭の姿にして女の英よ。鄒(待徴)や禍を避け、榛莽に伏す。婉如たる嬪よ、執われて囚虜と為る。泥沙を匍匐して、極望するも睹る無し。授官の告を出だし、垂白の姥に託す。姥夫人に感じ、爰に鄒君に達す。兵解かれ尸を求むるに、宛も江濱に在り。哀風起きて連波と為り、病氣は結ばれて孤雲と為る。鳬雁之が為に哀鳴し、日月之が為に蒙昏す。景は移るも(その心の)恒なるを端表す。恒直にして勁芳、霜を貫き独り存す。子の父(薄自牧のこと)の若からざる(長生きできなかつたこと)を知るも、誠なる(誠実さに満ちている)哉、長者の言よ。

江左の乱の折、薄自牧の娘で鄒待徴の妻となつた者が捕らわれ

てしまった。沙泥はいざり回り、遠くを眺めたが何も(援軍のことか―筆者)見えなかつた。そして辱めを受けようとした時、娘は自身の証明となる紙片を村の媼に託して、自決したのである。媼は夫人の心に感じ、それを夫の鄒待徴に届けた。やがて賊軍が平定され、待徴が娘の遺体を探すと、それは江岸にあった。ために風は悲しみ気は雲となり、鳥らもつらそうに啼くではないかと、云々。

賊徒の冒瀆から貞節を守るという極限状況下での悲劇を描いたこの作品について、独孤及は「礼教を敦うするは、則ち〈哀節婦賦〉〈靈武二孝讃〉」(前掲「趙郡李公中集序」と述べる。『全唐文』『唐文拾遺』『唐文統拾』の「節婦」表現五十六例中、乱離下の「哀節婦」を取り上げたのは、この李華の一例だけで(独孤及のはそれを論評した文)、その他はほとんどが家庭の中において「義なる夫、節なる婦」を並び称えるものである。それは『全上古三代秦漢三國六朝文』所収の作品でも同様である。ただ『唐宋筆記叢刊』にはわずかに『唐語林』「賢媛」(宋王讜撰 周助初校證 中華書局一九八七)に一例ある。だが、それはこの李華の話そのものであり、「江左の乱、江陰の尉・鄒待徴の妻薄氏、盜の掠する所と為り、密かに待徴の官告を以て村媼に託し、而して後之に死す。李華、『哀節婦賦』を為し以て世に行わる」とある。賊徒の性的蹂躪という衝撃的事件を文人が作品として取り上げるのは、当時の通例ではないと分かる。

ただし例外がある。史書等の「列女伝」にはある程度の数、乱離下の節義の話が見られる。劉向『列女伝』は一二例しかないが、『新統列女伝』（明・黄希周撰）は、この種の乱離下の節婦の話を、歴代の史書から相当数拾っている。ただこれは選択にムラがあるので、それをそのまま引用するよりも、この方面で重要な仕事をされた山崎純一氏のを引かせていただくことにする。たとえば、氏の「両唐書列女伝と唐代小説の女性たち」^④が参考になる。ここで氏は、両『唐書』列女伝計五十六名（二十九名が重複）の列女を孝悌・守節・貞烈・母儀・忠烈の五つに分け、その「貞烈」の（イ）「貞操を守るための烈死」を、賊徒などに襲われた際に死をもって節を貫いた項目にあてて、それを列挙すると（新は新唐書、旧は旧唐書の略）、

- 樊彦琛の妻魏氏（新・旧） ○符鳳の妻玉英（新）
- 竇氏の伯女・仲女（新・旧） ○王泛の妻裴氏（新・旧）
- 鄒待微の妻薄氏（新・旧） ○李廷節の妻崔氏（新）
- 殷保晦の妻封絢（新） ○李拯の妻盧氏（新）

である。史書は公的性格をもった記録書であり、一個人のモラルの発現の場ではないから、叙述にともなう心理的負担は全面的にはかぶらない。では一個人がこれをものした例をとみると、右掲の総集には見あたらない。そうしたモラルの厚い壁にあえて個人

盛唐の復古論者・李華の意識変革論（加藤）

が挑み、この領域に初めて筆鋒を向けたということは、李華という人間の意識の中で何か大きな歴史的变化が生じていたことを物語る。

『唐書』列女伝の「貞烈」（イ）の原文のほとんどは、「賊の掠す所と為り、將に之を汙けがさんとするも、従わず。…則ち水に死す」（『新唐書』鄒待微の妻薄氏伝）等というように、淡々と事実のみを記すにとどまる。しかし、薄氏伝はこれで終わらない。注目すべきはその後にある。次の記述を見られたい。「聞人（名望家の意）の李華、「哀節婦賦」を作る」と。このような哀節婦の事件が、一名望家の手により作品化され世に伝わるといふは、その他の伝には一例もない。加えて、「執われて囚虜と為る。泥沙を匍匐して、極望するも睹みる無し」のようなリアルな筆致は、前掲の李華「古戦場を弔う文」の、「利鏃は骨を穿ち、驚沙は面に入る。…屍は巨港の岸を填め、血は長城の窟に満つ。…心を傷ましめ目を惨ましむ。是くの如きもの有るか」とも共通するものであり、酷い現実思わず目を背けそうになるが、それだけ李華が強靱なモラリストであることを端的に示す。この重い事実を見逃してはならない。

賊徒の婦女冒瀆の記述ですさまじいのは、『隋書』列女伝の「趙元楷妻（崔氏）」の場合である（『新統列女伝』第四十五所録）。崔氏が賊に捕らえられ妻になるよう強要されると、「我士大夫の女なり。僕射（元楷の父・儵ひょう）の子の妻為り。今日、破亡する

に、自ら即死すべし。賊の婦と為らしむるは、終に必ず能わず」と言い放った。怒った賊徒は野獸のように荒れ狂い凌辱しようとした(大意のみ記す)。崔氏が「分かったからこの縄を解いて」というと、賊はそれを認めた。崔氏は着物を身につけるや否や賊の刀を奪い、「私を殺そうというのなら勝手にoshi。もし死にたければ、かかつてこい」と叫んだ。賊は激怒し乱射して殺害したとある。

これほどの陰惨な記述は史書の中でもごく稀であるが、まして一個人の作品においてとなると、李華のごときリアリティをもった描写で、自決に至る節婦の様を表現したものなど存在しない。崔氏伝ほどの過激な筆致ではないが、このような現実からも目をそらさず直叙するところに、李華の剛胆な性格が見出される。その根底には、それまでのモラルとは一線を画す個としての意識の変化があった。そうした強烈な正義感に裏打ちされたモラリストぶりが、志のある若い士大夫らを引きつけ、開元から天宝年間、李華は顔真卿・蕭穎士・賈至らの名だたる士人とともに世に併称され、一時代を牽引したのである。

その影響の一例として考えられるのは、例の柳宗元「河間伝」の話である。これはもとは貞淑だった女が汚され、後は淫婦になり果てるというインモラルな物語で、女性の貞節観を大きく塗り替える衝撃的なものである。けれども、李華という一個人が婦女のモラルの重い扉を開き、羞恥心を緩和しておいてくれたことの

助力は少なくないと思われる。ディテールの表現にまで及べば李華の賦とは随分異なるが、それにしても高級官僚がこのような話を記す際の対世間的な抵抗感は、随分やわらわけてくれたのではないか。

二 士大夫のあるべき道——「正交論」

さらにもっとよく李華の人間論を展開したのが、長編「正交論」である。これはなぜか独孤及「趙郡李公中集序」に掲げられないが、文学史的には、中唐の議論の先駆的なものとして位置づけられ、その意味できわめて重要な作品である。これも従来ほとんど取り上げられたことはない^⑤。以下、区切って見ていく。

「正交論」(『全唐文新編』卷三一七)

聖人の魯に生まれて、七十子の諸侯を遍遊す。文武の道、瞠^{くら}れども復た明るうす。孔伋^{こうきん}・孟軻^{もうか}の徒は、儒として尊せざる無し。漢代の人心、尚お樸^こたり。辟署^{へきじょ}は州郡より公府(に至るまで)、往往にして奇節駭俗^{かいそく}の士有り。東京の宗祖は学を好み、海内翕然^{きゅうぜん}たり。是を以て王室には柱石^{ちゅうせき}の臣多く、交遊に死生の友有り。

聖人孔子が魯国に生まれて七十の諸侯を遍遊され、すっかり

曇ってしまった濁世を再び明るくされた。そんな孔子を孫の孔伋、また孟子は深く尊敬した。漢代はまだ人間も質朴で、国の役所には州郡から公府に至るまで、しばしば驚くほどの奇特定の節士がいたものである。洛陽のわれらの宗祖は学問を好み、かくて国中から人士が集まってきて、王室には国家の大黒柱となるような臣下が多く、ゆえに生死をともにする交友を行ったものだ。

李華はそう古の世を回顧しまつとうな交友の道が行われた時代をふりかえる。その理由を次の段落で李華は選拔法に関係すると説く。漢代の「郷里の選」、すなわち「郷挙里選の法」（本籍地での郷評による登用）に言及するのだが、そのことを先に簡単に述べておくならば、その主旨は基本的には人望を見極めての推薦制というにあった。「孝廉」「茂才」と呼ばれるのが代表的なものが、李華は制度の変更とともにその長所も失われてしまったと理解していたのだろう。

降りて魏晉に及ぶに亦た未だ甚だ嫌しからず。近代は郷里の選無ければ、多く京師に寄隸し、時に隨いて聚散す。牒を懷いて自命し、積みて以て常と為す。吠形一たび発するや、群響雷応す。銓擢誤り多ければ、之を知ること固より難し。名実をして兩つながら虧けしむ。朋友の道薄きは、蓋し此に由るなり。

盛唐の復古論者・李華の意識変革論（加藤）

魏晉以後の世になると、世の交わりは楽しからざる空氣が蔓延するようになった。そして現代はかつてのような「郷挙里選の法」が採用されていないため、多くの人士が都に寄寓し、科挙の試験のつど集散することとなった。彼らは書き付けを胸に抱いて自ら任じ、それを高く積み重ねるのが日常風景と変わった。どこかで一声吠えれば、たちまち怒濤か雷鳴のように広がってしまう。選拔の仕方に誤りが多いので、何が正しい道なのかを知ることは難しい。名も実もともに欠けているのである。「朋友の道」が希薄なのは、けだしこれに因る。

開元・天宝年間は、一般的には科挙制度が定着していたと見られがちだが、内実はそうでもなかった。李華はいう「近代は郷里の選無し」と。その問題点がどこにあるかという点、その後の「多く京師に寄隸し、時に隨いて聚散す」と併せ考えると、漢や六朝では一応郷里でその人物の德行や才能を日頃から見ることを重視し、そこから中央へというステップを踏んでいたのに、現在では選拔の権限の多くが都での試験に一元化されたため、そのつど受験生が上京してはまた解散するという方式になったということへの疑問があったのだろう。このことを、その少し先の「銓擢誤り多し」をも視野に入れて考えるに、中央政府が科目を定めて選考を一元化したことにより、別の弊害も生まれるようになったことを指すのかと思われる。つまり旧来の門地の弊害を排除すべく、官吏登用の方法や権限を中央に集権化したものの、そこに

また新たな問題——つまり人間性の道義的薄弱さ——が生じてきたことを懸念するのである。それはおそらく「牒を懷いて自命(自ら認める意)し、積みて以て常と為す」ことと関係する。この部分は、入試対策用を書くことになった例の行巻などの執筆^⑥にあくせくとして、それを積み上げてひとり満足するのが常態化し、肝心の人間性や社会性をすっかり学ばなくなったという意かと思われる。ただの入試用の勉強だけでエリートになる輩の道義性の低さを問題視したものであり、これまで取り上げられてこなかったが、これは科挙に対する意識の大きな変革を示すじつに重要な資料といえる。後の韓愈が「彼の童子の師は、之に書を授けて其の句読を習わす者なり。吾が所謂其の道を伝え其の惑いを解く者に非ず」(「師説」と述べることの、これは先鞭をなす。

かくして「吠形一たび発するや」、これも理解が困難だが、受験生の不安な心理を述べた文脈からして、おそらく政府がその時々意向により試験制度や評価方法を変更したりすることが原因となつて、おびえたような言動を引き起こすことを指すのではないか。つまり根の浅い勉強しかしていない受験生は、一たび不安に駆られるや「群響雷応し」、パニックを喚起してしまうという意かと思われる。

今、一例を掲げる。開元二十五年、詔が出て、進士・明経のあり方が批判された。いわく、「今の明経・進士は、則ち古の孝廉・秀才なるも、近日以来、殊に本意に乖り、進士は声韻を以て学と

為し、多くは古今に昧し。明経は帖誦を以て功と為し、旨趣を窮むること罕し。安んぞ本を敦くし古に復し、経明るく行い修むるを得んや」と。近年の進士は詩賦中心の受験になっており、古今のことに暗く趣旨が分かっていない。本質に通じ古に返るには、「今より以後、…進士中は、兼ねるに一史に精通し、能く十條を試策し、六已上を得る者有らんことを」(『唐会要』卷七十五 開元二十五年)と要求する。李華にいわせれば、このくらいの変更でおたおたする程度なら、真の学問をしたとはいえぬというのである。

当時の科挙試験の状況を一瞥すると、「(開元)十七年三月、国子祭酒楊場^{ようばう}上言す『伏して承前の例を聞くに、毎年応挙するものに有数千、両監に及第するは一二十人に過ぎず。云々』と」(杜佑『通典』卷十七 「選挙五」)とあり、同様の記述は「評して曰わく『我が開元・天宝の中、一歳の貢挙、凡そ数千』」(同卷十八 「選挙六」)等とあるから、毎年数千人の受験者がいたことが分かる。また合格の割合だが、「其れ進士は、大抵千人に第を得る者は百に一二、明経は之に倍し、第を得る者は十に一二」(同卷十五 「選挙三」)とある。その中でも進士が高い評価を得たことは、周知のように王定保『唐摭言』が「咸亨^{かんとう}の後、凡そ文学に由り一たび有司に挙げらるるや、競つて進士に集む」(「進士を述べ上篇」)「進士に由らずんば、終に美と為さず」(「散序進士」)と記す通りである。

今、文学史に名を知られる進士及第者を出した年に限り、その数と人物（著名な文人がいる場合、進士科以外の名前も掲ぐ）を、清・徐松『登科記考』巻七・八に検すると、開元九年（七二二）…三十八人（王維・薛稷ら）、十年…三十三人（孫逖^⑧、文藻宏麗科に合格）、十一年…三十一人（崔顥）、十三年…不明（祖詠ら）、十四年…三十一人（儲光羲・崔国輔・綦毋潜ら。なおこの年、孫逖、今度は賢良方正科に合格）、十五年…十九人（王昌齡・常建ら。なおこの年、王維の弟王縉、高才沈淪・草沢自挙科に合格）、二十一年…二十五人（劉長卿・元德秀ら）、二十二年…二十九人（顔真卿ら。なおこの年王昌齡、博学宏詞科に合格）、二十三年（七三五）…二十七人（李頎・蕭穎士・李華ら。この年、崔国輔が牧宰科に合格、孫逖が知貢挙を務める）が出た。進士等出身の文人が、このようにまとまって輩出したのはかつて例がない。李華、およそ二十歳のまさに春だった。

その李華が、科挙界の実態をこれほど鋭く抉るとは驚きである。批判の理由はいったい何なのか。じつは右に掲げた人物は、科挙合格者のごく一握りでしかない。再度数字をよく見ると、たとえば李華が合格した開元二十三年は二十七人の進士が誕生しているが、李華から見えて同士と呼べる人間は蕭穎士ただ一人にすぎない。また同二十一年の合格者は二十五人いるが、李華が尊敬の念をもって名を掲げるのは元德秀のみである。同期の進士合格者仲間「に真の友を求める青春の熱情は、かの韓愈の「我 年二十五／友

盛唐の復古論者・李華の意識変革論（加藤）

を求むれども其の人に味し／哀しみて西京の市に歌うに／乃ち夫子と親しむ／尚ぶ所 苟も趨^{みち}を同じうせば／賢愚 豈に倫を異にせんや」（「北極 李観に贈る」）を想起させるほどだが、横道にそれるけれども、じつはこの李観こそ李華の「観の呉中に往くを送る序」に「永泰二年四月叔父華序す」、また『新唐書』李華伝に「（李華の）従子観。…観、文を属^つり前人に旁治^{ぼうち}せずして、時に韓愈と相上下と謂う 云々」と記すのによれば、李華の甥だった。ただこれらの記述と韓愈「李元賓墓銘」の間に齟齬が見られることから、「二人の李観はおそらく同姓同名の別人であり、『新唐書』の理解に問題がある」との解釈もある^⑨。それもあつてか、従来、「李華—観」の「叔父—甥」関係についてはほとんど言及がない。ただ『新唐書』をそのまま用いると、韓愈が李観と親友になったのは、叔父李華の存在があつたからという可能性を排除できない。今は、李華と韓愈が不思議な糸で結ばれていることのみを確認するにとどめる。

三 「奸党の嫉^{にく}しみ」を買った論議

さて、右掲の進士は李華の作品にその名を見ないものの、皆すぐれた文人たちだった。だが、その他の大半は「名実をして兩つながら虧^かく」。これは彼らは名利を求める徒にすぎぬと言いつに等しい。このような剛直な発言には、物事の奥まで見通す深い

省察力、新しい時代センス、そして胆力などが必要である。彼の意識の変革から生まれる痛打力は、当時の志ある仲間を大いに敬服させたに相違ない。

況んや衆邪を雄と為し、孤正を失守するをや。中人の性を誘い、不善に易し。便身の路を求めては、庸くんど直道を知らんや。流俗に従わず身を修めて死を俟つ者、益々寡し。加うるに以て三尊は師訓の喪を闕き、朋友は寢門の哭無く、学府に衰服の制無し。礼は亡びて寢遠にして、言う者非を為せり。人従いて以て儻み、俗用て篤からず。弊は經学を専らにせずして、苟免に淪む者に在るなり。師に儒宗乏しければ、則ち道尊ばず。道尊ばざれば、則ち門人親しまず。友学ばざれば、則ち義固からず。義固からざれば、則ち交道重からず。選は郷に由らざれば、則ち情府に繋がらず。情府に繋がらざれば、則ち挙薦さるるも恩は寡し。三は化人の大端なるに、而れども情礼尽く曠し。微倖の道は長く、而して純愨の道は消ゆ。悲しいかな。

まして多数派の邪心を雄毅であるとし、少数派の正義が失われいく中ではなおのことそうである。そして一般人の気持ち（間違った方向に）誘い、不善にたやすく手を染めさせ、わが身の利便になる方途ばかりを求めさせるようでは、人々がどうして真っ

直ぐな道など知るはずがあらう。世俗に流されず、一途にわが身を修め続け最後の死を迎えるような人間は、ますます少なくなっていく。葬礼一つとっても、三尊（君・父・師）、朋友・学府みなまともな儀礼になっていない。礼は滅び次第に遠くのものになってしまい、それらしいことを言っても口先だけのことで、やることは違う。こうして人々は盗みを恥じないようになり、世俗も篤実ではなくなった。その弊害の原因は經学をしつかり治めず、一時逃れの姿勢に陥っているからである。師に立派な儒者が乏しければ、だれも道など尊ばない。道を尊ばなければ、門人同士親愛の念をもたない（第一）。かくて友人がよく学び合わなければ、義理は固くならず、義理が固くなければ、交友の道は重いものとならない（第二）。人材の登用が郷挙を用いない現況では、人々の心情は政府には繋がらない。心情が政府に繋がらなければ、たとい選抜されても恩愛の思いは少ない（第三）。これらの三点は人々を教化する大きな端緒となるもののに、心情も礼儀もすべてがダメである。まことに僥倖への道は遠くなり、純粹な誠実の道は消滅してしまった。悲しいことよ。

「衆邪」と「孤正」があべこべな現実への慨嘆は、かの欧陽修「小人の偽朋」と「君子の真朋」（「朋党論」）の論調に似る。従来、「朋党論」のこの論は彼に始まるのではなく、その先例として裴度の弁があると指摘されていた。すなわち、「君子の徒は徳を同じうし、小人の徒は悪を同じうす。外は甚だ類するも、中は実に

遠く在り」(『新唐書』裴度伝)という発言だが、表現はやや異なるけれども、その主張において李華の「正交論」はさらにその前に位置する。

続けていう。今の世は經学を基本とせず、古のような「郷里里選の法」を行わず、これではまともな社会にできるわけがないと。一体正しい人の道とはどういうことなのか。その正しさからどれだけズレているのか。この世を本来のあり方に持って行くにはどうすればよいのか。世の弊害をひとたび根源から捉えたと、矛盾だらけの誤魔化しに見えてくる。李華は三つの理由を真正面から指摘、苦悶の渦にもがいた分の熱量をもって筆鋒の鋭さに転化する。本質を喝破した歯切れのよい議論は、志ある人々の共感を呼んだだろうが、当局に鋭い刃を突きつけ非難を繰り返す論調は危険この上ない。そのことを恐れ彼に近づかない人士もまた多かっただろう。タブーの重い扉をついに開けてしまった彼には、様々な非難が押し寄せたはずである。だからこそ、早すぎた覚醒者・李華には、同志がこの上もなくありがたかったのである。李華のその時の孤立感を思うと、肅然たる思いに駆られるが、その本質論的議論かつ熱情的な多弁は、やがて確実に韓愈の先蹤者として大きな役割を果たすことになる。盛唐期にこのような散文の事例があったことは、これまで具体的な実感のある形では意識されてこなかったが、今ようやくここにその空隙を埋めることができるのである。

盛唐の復古論者・李華の意識変革論(加藤)

礼の首は冠はじめして成人するに於いてす。日を簋げいし賓を簋げいして、即ち廟を事とす。同師の友、郷邦の族、醯しょうして之を礼し、遂に相与に之に字あざなす。身は何ぞ以て嚴ならざる。友は何ぞ以て敬せざる。暴慢有りと雖も、自ら入る無し。嗚呼、士大夫之を略して、礼、地に墜つること久し。

礼の初めは、加冠して成人することに始まる。まず簋げいの占により吉日を選び、またよき賓(冠をかぶせるのにふさわしい賓)を選ぶ。(それが定まると当日の)儀式は、先祖の廟前で執り行われる。そして師を同じうする友人、また同郷の一族などが、醯しょう(返杯しない酒礼)して礼を交わし、いよいよ成人の証としての字を付けるのである。その身は嚴かでないことがあろうか。友らは尊敬しないことがあろうか。(このような礼の徳を修めた者は)たとい粗暴なことが起ころうとも、自分からその中に入っていくことはあり得ない。ああ、士大夫がこのような慣例をおろそかにしたことで、礼は久しい間地に墜ちてしまった。

この一段は、『儀礼』「士冠礼」に基づくもの^⑪。李華の文章が「五経を以て泉源と為」(前掲「李公中集序」)す一例である。李華はいう、礼はまず元服の儀礼―士冠の儀―に始まると。儀式はすべてが定められた順に厳かに進行していき、賓による字の命名へと展開する。『儀礼疏』を撰した賈公彦は永徽年間(六五〇～五五)に太学博士となった人物。李華は世相の衰退の原因を、儒

教の根幹たる礼の輕視にあると考えていた。この儒教原理主義が彼の基本であり、それを主張し実践することは、当時の弊害を正さんとすることを意味する。李華の口調は最後の高潮へと力がこめられる。

信義厚からずして、斯に漸なる有るか。後進は未だ較するなく、是を以て非僻なる者は、多く成に附し敗を遠ざく。成るは或いは経に非ず、敗るるは或いは義に非ず。是に於いて大雅の友は掃除され、無妄の交は風動す。利招けば、則ち機網を悔いず、名眩めば、則ち心を鼎鑊に甘んず。之を傾けるに勢いを以てすれば、則ち天地を畏れず。之に餌するに権を以てすれば、則ち其れ親愛をも忍絶す。苟しくも之を失うを患えば、至らざる所無し。故に詩に谷風の刺有り、礼に邦朋の禁有り。…嗚呼。至交の道殆んど絶ゆるか。

信義は薄れ、どんどん消えかかっている。後進の徒は(何が正しいのか)未だによく比較検討することもない。かくして邪惡な者は、その多くが勝ち組にくっ付き負け組を遠ざける。勝ち組といっても経学によってではないし、また負け組といっても正義を実践してのものではない(負け組の中にまで邪惡は浸透している)。かくして大雅の友は排除され、不埒な交わりが広範に広がっていく。利益でもって誘われれば、人を陥れる罟を企むことも後

悔しないし、また名声にくらめば、鼎や炉で煮たり焼かれたりするほど悪いことをしようが、心はそれに甘んずるのである。加えて勢いをもって傾倒していくので、天地さえも恐れず、餌として権力をちらつかせるので、親愛なる者に対してまでもむごい謝絶をなす。ひとたび正しい交わり方を思えば、世の中どこもかしこもそうである。(古来よりそうなのであつて) だから『詩経』に「谷風」の諷刺があるのであり、また『周礼』に「士を管理する八つの規則」の一つに「邦朋を為すこと」というのがあのだ。…ああ、親密なる交誼の道はほとんど途絶えてしまったのか。

この齒に衣着せぬ議論。ことに「利招けば、則ち機網を悔いず、名眩めば、則ち心を鼎鑊に甘んず」の文章は、当時の世相がどれだけ腐敗していたか、李華がそれにどれだけ危機感を募らせていたかを知らしめる。欧陽修「朋党論」には歴史上の「朋党」(後漢の党錮と晩唐の白馬の悲劇など)が略述されるが、この李華への言及はない。党派という認識が薄かったためかもしれない。ただ「君子の…守る所のものは道義、行ふ所のものは忠信、惜しむ所のものは名節」であることを力説し、「小人の好む所のものは祿利、貪る所のものは財貨。その利を同じうする時に当たりて、暫く相い党引して朋を為す」ことを痛烈に批判する論調は、ほぼ同一である。また韓愈の「原毀」にいう、「事修まりて謗り興り、徳高くして毀り来たる。嗚呼、士の此の世に処して、名譽の光、道徳の行いを望むこと、難きのみ」もこの連なりであろう。

また「之に餌するに権を以てす」は、「口に密、腹に劍あり」と評された宰相李林甫への反感がむき出しである。かつて開元十二年のことだが、李林甫の宰相就任をめぐり、張九齡が強く反対。玄宗に彼の登用は国家の憂いとなると進言するも聞き入れられなかった（『新唐書』奸臣上・李林甫伝）。このことがあつて李林甫は科挙官僚を敵視、卑怯な手段での賢臣排斥が始まる。まず最初に狙われたのが、科挙派の総帥張九齡である。同二十五年、都督牛仙客を宰相に取り立てるか否かをめぐって李林甫と対立、結局、荊州長史に左遷させられるはめになる。続いて天宝五載（七四六）、左相李適之を排除するや、李林甫の奸智的独裁が開始される。そして同六年には名士李邕・裴敦復を杖殺、また李適之を自殺に追い込むのである。

またこの年、「詔して天下の士を徴す。人にして一芸有る者は、皆京師に詣り選に就くを得たり」だったが、李林甫は科挙に応募していた杜甫・元結らを、「草野の士 猥多なるを以て、当時の機を洩漏せんことを恐れ、朝廷に議して曰わく、『挙人、卑賤・愚瞶（おろか）なるもの多くして、礼度を識らず。恐らくは（俚）言有りて聖聴を汙濁せん』と」（以上、元結「喻友」『全唐文』卷三八三）という屁理屈をこねて、全員落第させてもいる。天宝十一載、李林甫は死ぬが、今度は無学不良の楊国忠が宰相となり、なお暗黒時代が続いていく。

このような状況下で本論が執筆されたことを考えるに、彼の抗

盛唐の復古論者・李華の意識変革論（加藤）

議はきわめて危険をはらむ行為だった。独孤及「檢校尚書吏部員外郎趙郡李公中集序」には、この頃の李華についてこう記す、

開元二十三年、進士に挙げられ、天宝二年、博学宏詞に挙げらる。皆、科首為り。南和尉より秘書省校書郎に擢（ぬきん）でらる。八年、伊闕尉を歴たり。斯の時に当たり、唐興りて百三十餘年。（中略）公の才、時と与に并（な）ぶが故に、名に近づかずして名彰わる。時輩の帰望するもの、鱗羽の虬龍に於けるがごときなり。十一年、監察御史を拝し、権臣の柄を窃（ひそ）かにし、貪猾の路に当たるに会い、公、入りては方書を司り、出でては二千石をも按ず。斧を持つて向かう所、郡邑肅為り。奸党の嫉（にく）む所と為る。御史府に容れられず、右補闕に除せらる。

すなわち時代が求めたものに遇ったがゆえに、とくに名声を願ったわけではないのに世の注目を浴び、多くの人材が彼のもとに結集することとなった。監察御史を拝するや、朝廷の内外にあつて敏腕を振るい、たとい二千石の長官クラスでも躊躇はしなかった。まさにモラリストの本領発揮である。斧をもって（―不正をただす官の持ち物）臨めば、郡邑は肅然と襟を正しうしたのである。それは当然のごとく奸党の憎むところとなり、ついに御史府を追放される身となる。―李華の道義性を前面に押し出した熱い議論は、韓愈ふう「原友」とでも題したくなるほどだ。交

友のあり方についてこれだけ熱弁をふるった前例としては、世外の立場からものした嵇康「山巨源に与えて交わりを断つ書」、孔德璋「北山移文」などがその典型例だが、仕官する者が儒教的道義を掲げて時の権力と抗しつつ、交友論や世道論を真正面から力説したものは未だかつてなかった。鋭利な文章力で論を展開し、世論を真つ向から動かした科挙官僚というのは、李華やその親友・蕭穎士らが最初のケースだろう。蕭穎士については、これまた別に論じなければならぬほど未知の世界が広がっており、ここでは言及しなくておく。一方、詩に目を転じると、杜甫に「貧交行」という有名な詩があるが、広く送別詩まで含めると、李白・高適らがいかに友情のあり方にすこぶる熱心な人間たちだったか、近年の成果がよく示している^⑬。ただそれは詩文を問わず時代の熱気としてあったものであり、今後より総合的に見ていく必要がある。

視点を換えると、眼前の宮廷政治に不満を抱く士大夫が、自己の信念として掲げる理念世界を、そうした熱き有志グループに向かって積極的にディベートし始めたことを意味する。宮廷側からすると、いわば「復古会議」の有志らが徒党を組んでいにしえの正道を唱えているうちに、百家争鳴の言論が巻き起こり、議論が沸騰していった暁にどんな途方もないものを巻き込むかもしれない。そもそも百家の弁は、言論統制の弱い環境下で放縦なエネルギーを発散して生まれてきたものであるから、復古主義というの

は議論の行方いかんではまことに危険この上ない。ゆえに牽引者李華は権力の府から恐れられ、結局は埒外に遠ざけられてしまう。復古論者・李華の不遇の事例は、まさしく中唐期に起きた権力の府と文人官僚間の文学を介した抗争の先例といえるのである。

四 「原道」の前奏——「元魯山臺碣銘并序」

では、李華が兄事した元徳秀というのは、どのような人物だったのか。当時、元徳秀のもとに集まったのが、あの蘇源明や房瑄だった。すなわち、「房瑄、徳秀を見る毎に、歎息して曰わく『紫芝（徳秀の字）の眉宇を見るに人をして名利の心を都て尽くさしむ』と」「蘇源明、常に人に語りて曰わく『吾、不幸にして衰俗に生まるるも、恥じざる所は元紫芝を識ることなり』と」等と記される（『新唐書』卷一九四 卓行・元徳秀）。この蘇源明や房瑄こそ、杜甫が敬慕した改革の志をもった人物でもあった。すなわち記す、「源明、雅に杜甫・鄭虔と善し。其の最も称せる者は元結・梁肅なり」（『新唐書』卷二〇二 文芸中・蘇源明伝）と。その元結とは、この元徳秀の族弟にあたる。すなわち顔真卿「唐故容州都督兼御史中丞本管経略使元君表墓碑銘并びに序」に「十七にして始めて書を知り、乃ち学を宗兄の先生徳秀より授かる」また元結「元魯縣墓表」に、「天宝十三年。元子の従兄・前の魯県大夫徳秀卒す。元子、之を哭すこと哀し」等と記される通りで

ある。

以下、李華「元魯山墓碣銘并序」に即して区切って見ていく。これは前掲の独孤及「趙郡李公中集序」に、「賢達の盛徳を表わすは、則ち「崔賓客集序」「元魯山碣」「房太尉德政碑」「平原張公頌」云々……」とある、その銘である。

「元魯山の墓碣銘、並びに序」(『全唐文新編』卷三二〇) 維れ唐の天寶十二載九月二十九日。魯山令、河南の元公、陸渾草堂に終わる。春秋五十九。名節に服する者、心を痛めざるは無し。嗚呼、堂内に篇簡・巾褐・枕履・琴杖・簞瓢あるのみ。堂下には接賓の位、(及び)孤甥学を受くるの室有るも、是に過ぎりて往くのみにて、以て送終(埋葬の意)する無し。名高の士、陸渾の尉梁園の喬潭、(遺族に) 賻るに清白の俸を以てし、其の喪葬を遂ぐ。明月十二日を以て、居る所の南岡に遷る。礼なり。

前述のように、李華はただ詩賦の才でもって進士に合格すればよしというのではなく、深い人間性や道義性が不可欠と見ていた。そんな李華の指標にかなう人物が元徳秀だった。その死は「名節に服する者、心を痛めざるは無し」だったが、誰も埋葬する者がいなかった。陸渾の一名士により何とか葬儀を済ませたという。

公諱は徳秀、字は紫芝。延州使君の子。後魏の七葉にして易えて元と為す。公は其の裔なり。…延州、即世(「死去」)の後、昆弟凋落し、慈親は羸老す。小と無く大と無く、仰いで公に飴(「養」)なわる。府貢に応ずるに及び京師に如く。親に離るるに忍びず。躬ずから負い輿を安んず。往復すること千里。才行第一を以て進士に登科す。

父が亡くなり兄弟は没落、母親また年老いていたため、家族は大小となくみな彼の肩にのしかかってきた。府試に應ずるべく京師に出かけた時には、親を背負って往復千里も移動したほど、徳行そなわる人物だった。単に才能だけではなく「才も行いも第一」をもって進士に合格したのである。このようなあり方こそが李華の理想だった。されば、「牒を懷いて自命し、積みて以て常と為す」だけの才士は、人間的な「正しい交わり」を顧みない人物として非難されたのである。

艱に丁つ。声は心を動かす。既に苴臬を過ぎるも、刺血もて佛像を画き写経す。賁られざる身を以て、極まり罔き報を申ぶ。食に塩酪無く、居りて爪翦無きこと三年。先人未だ兆を耐さざるに、身は当室に迫る。未だ忘れざる哀しみを緘じ、調(選挙の意)に参じ仕を求む。

母の死に会ったとき、その泣き声は心まで揺さぶるほどだった。麻の葬服の期間を過ぎてても、自らの血で仏像を描きまた写経を続けた。「刺血」してというのは、尊い自らの身をもって、その限らない報恩の思いを表したのである。食べ物には一切塩も酪も用いず、手足の爪も切らずに過ごすこと三年。彼の服喪の徹底ぶりが分かる。先祖がまだ墓（兆は兆＝墓のこと）の合祀も行っていないうちに、自分が跡継ぎになってしまったことで、たちまち経済的負担が生じ、まだ忘れたい悲しみはあったものの、その思いに封をしてやむなく選挙に応じ出仕を求めたのである。―元徳秀は受験の才に長けただけの徒ではなく、人間的にじつに高尚な人物だった。李華はそこに当代の人士のあるべき理想を見たのである。

銓試は等を超え、南和の尉に補せらる。黜陟使の至行なるを以て上聞し、左龍武軍録事を授くも、墜つるに因り足を傷む。樂正の憂、愀然として容に満つ。甥姪の婚仕を以て念を為す。署を魯山令に授かる。痼疾を以て趨拜する能わず。故に後、長吏（ことうと）僉く客札を以て之を待す。常に盗を獲うるも未だ刑せず。浜山に属すの郷、猛獸の害を為すと称す。盜庭に請うて曰わく、「明府の慈仁に感ず。願わくば獸を殺して罪を贖わん」と。公哀みて焉を許す。僚佐堅く請うも、公慮を変えざる無し。乃ち従い械（かせ）を破りて之を縱つ。盜果して獸

を屍（たか）して命に復す。吏人・老幼、咨嗟（しき）し震勤せり。庭宇より発して四鄰に播く。則ち政化の行い知るべきなり。

選挙は、一般の成績を上回って見事合格、南和尉に補せられた。人事担当官が彼の卓越した行いに感心して上奏したことで、次に左龍武軍録事を授かったが、しかし落馬して足をけがしてしまった。当時の宮廷の雅楽については正調をはずれていることを憂い、その心配げな表情がそのまま容姿に充ち満ちていた。また（一族の親代わりをしていたから）甥や姪の結婚とか出仕とかにいろいろ心を配っていた。魯山令（―河南地方だろう）のポストを授かったが、持病があったため任地に赴いて拝礼できなかった。しかし、後に長吏らの方からやってきて客人の礼をもって接したほどだった。盗みを働いた者を捕らえると、いつもすぐには処罰を下さなかった。浜山に属する郷では、猛獸が害をなしてひどい有様で、その地の罪人がお役所にいうには、「お上の慈愛あふるる仁徳に感心致しましたでござえます。一つお願いがありますだ。その猛獸をばわしがやつけて罪をつぐねえてござえやす」と。元公はそれを哀れんで許した。同僚の者が（どうせ逃亡するに違いないと思い―筆者補）お止めくださいと固く申し入れたが、考えを変えなかった。そして枷をはずして、かの者を釈放した。はたして罪人は獸を倒した後、きちんと復命してきた。役人も老人も子供もみな感嘆してどよめいたのである（―なお勤は原文のま

ま。動の誤りかとも疑われる。その徳化は役所の中から始まり、ついには四方にまで及んだ。これによって元徳秀の政治の教化ぶりが分かる。

雅楽の正調にも熟達し、さらに親類縁者の面倒もよく見と、元徳秀は聖人のごとくであるが、中でも彼の風貌を伝える逸話が、右の盗人の話である。『旧唐書』李華伝はこのエピソードをより詳細に記すが、今、概略のみいえば盗人の心を完全に徳化し贖罪の気持ちをも自然に抱かせ、しかもそれが嘘偽りではなくやるべきことを終えるや、また舞い戻ってきたというのである。まさに人徳の極みである。

公幼きより貧に居り、服を累ねて斉しく斬る。故に親の在すに娶ること及ばず。既に孤なる後は、単独終身なり。人或いは絶後を以て焉を論すも、対えて曰わく、「兄に息男有り。先人の祀を曠しうせず」と。歴官の俸祿は悉く以て葬祭を経営し、孤遺に衣食せしむ。代りて之に下して日わく、「柴車にて返る」と。南のかた陸渾に遊び、一畝の宅を考う。八笥の直を発けば、唯だ匹帛のみ。居るに局鑰、牆藩の禁無し。生を達し物を斉しうし、其の好む所に従う。時に歎歳に属すや、句を渉りて烟無し。琴を弾じ書を読み、其の樂しみを改めず。好事の者、酒食を携えて以て之に饋る。陶陶然として身世を脱遺す。道德を涵泳し、清塵を抜きて顯氣に棲む。中

古以降、公比する無し。我を知ること或いは希ならん。晦くして耀かざるが故なり。是れ宜しく国老と為りて、更に道を論じ世を佐くべきも、羔雁至らずして空山に歿せり。慟くに勝るべき耶。

元公は幼少時より貧しかったので、服などはただ重ねてぎつくり切ったのを着ていた。それゆえ親が元気でいるうちに娶ることはできなかった。一人ぼっちになってからは生涯独身で通した。時々、人が子孫が絶えては困るぞと論したが、「兄に息子がおるゆえ、ご先祖の祭祀はおろそかにはならぬ」などと答えるのだった。役人をして得た報酬はすべて法事に使ったり、一族の孤児や遺児らの衣食代にまわした。それでいて彼自身は（何事もなかったように）、彼らに「わしは（粗末な）車で帰る」とあっさり言うのだった。河南地方の南方の陸渾に遊び、一畝ばかりの家を構えたいと考えるようになった。持ち物といえば八個ばかりの箱で、あけると匹帛しか入っていなかった。居住しても戸締まりの鍵もなく垣根もない暮らした。また公は生命の理をよく知っていて、分け隔てのない生き方をし、好むところに従った。飢饉の年などは、十日ほど炊事をしないこともあった。琴と読書を好み、この樂しみは生涯変わらなかった。ある好人物が酒食を携えて彼に贈ったところ、身も世も忘れるほどうっとりとして喜んだものである。道德に心から浸りかつ生き、清風無為の境地を高く抜き

んで、明るい天上の世界に住んでおられるお方だった。中古以来、公のような御仁は見たことがない。元公は小生をあまりご存知ではありません。凡庸で鈍才でございますゆえ。公こそは国老ともなつてもっと道について論じられ、世を補弼すべきでござったが、厚礼のともなつた招聘が至る前に、空山に没してしまわれた。嘆かわしいことよ。

ここには清貧を貫き道徳を楽しみ、あたかも孔門の顔回かともまごうばかりの見事な人物像が描かれている。「先王の道を明らかにし以て道き、鰥寡・孤独・廢疾の者は養う」と記すのは韓愈「原道」だが、右の李華の文章はそれに先行する。また「博く愛し行いて宜しいこと」、それが「仁義」だと韓愈は述べた。その道を堯は舜に、舜は禹に、禹は湯に、湯は文武周公に、文武周公は孔子に、孔子は孟子に伝えたが、その後は途絶えてしまったとの韓愈の弁は、彼の高い矜持性も伴ってあまりに有名だが、韓愈の主張の前に同種の文章がすでにあつたことは注意されるべきである。元徳秀は韓愈のように高い調子でそれを宣言したわけではなく、ただ自ら考える「原道」を自らの方法で実践したまでだが、李華が「中古以降、公比する無し」と絶賛する人物が出現し、また彼との「正交」を通して同士としての絆が深められ、そこからさらに志を同じうする一連の「原道」的人脈が形成されていった一経緯が、この李華の文章により確認されることの意味は小さくない。

独孤及の高弟・梁肅の李華を祭る言にこういう、

「常州の独孤使君の為に李員外を祭る文」(『全唐文新編』卷五二二)

嗚呼、疇昔の年、兄と接し討論す。倚伏の数(禍福の命の意)、或いは其の源を尋ぬ。嘗て謂えらく、「仁人は百禄(いよ)に蓄れり」と。兄に於いて如何。斯の道存する莫し。嗚呼、哀しい哉。惟だ兄のみ孝友・仁恕、高明・寛裕なり。何の徳か之茂れる。何の才か之富める。粹気は(心身に)筆者補(こ)積中し、四肢に暢びやかたり。発して斯文と為せば、郁郁たり耀輝たり。五百年自り、風雅・陵夷(次第に衰える意)すれば、手を兄に仮り、鬱として宗師と為す。

これは五百年この方途絶えていた古の正道の体现者、それがあなたですという最大の賛辞である。五百年前とは、すなわち漢代をさす。李華の「崔沔集序」にいう、「屈平・宋玉哀しみ傷むも、靡いて返らず。六経の道遯く」と。また「楊騎曹集序」にもいう、「識者は讜議し、道を論ずるを以て之を許す」と。古文の盛んだった漢代以来、五百年の大きな歴史の空隙を埋める「載道」の巨人李華を、梁肅は独孤及になリかわって文壇の「宗師」と称えたのだった。

従来、韓愈以前の古文運動理解は、具体的な作品を掲げての議

論が少なく、人脈の系譜を掲げるのに止まっていたが、以上のように李華の作品を踏まえることで、開元・天宝期と中唐期との密接な継続性が具体的な形で明確に押さえられてくるのである。

おわりに

無上の繁栄とまた底なしの墮落と混沌をきわめる世に、モラリスト李華は決然として吼えた。世はかくあるべしと。その昂然たる気概に微塵の混じりけもなかった。見事なほどの潔さだった。彼の胸腔には、それに適う具体的な人を得ているという確信があった。その一人物こそ元徳秀だった。李華はいう、「開元天宝間の詞人、德行をもつて時に著わる者を、河南の元君徳秀、字は紫芝と曰う。其の行事、趙郡の李華、墓碣を為し、已に之を書す」〔揚州功曹蕭穎士文集序〕と。その思いや知るべしである。李華またいう、「開元天宝以来、高名にして下位、華（立派）にして方に疾む（苦しむ）は、備挙（詳細に列挙）する能わず。然れども憶わるる所の者は、河南の元君徳秀と曰う。元終りて十年、南陽の張君に略有り。張没して二年、而れども君夭す。元の志は其れ道德たるが如し。張の行いは其れ経術たるが如し。君の才は其れ声望たるが如し」〔著作郎贈秘書少監権君墓表〕と。元徳秀と李華はいわば一心同体の同志だった。李華の継承者たる権徳輿はいう、「開元・天宝の間より、万方砥平なり。仕進す

盛唐の復古論者・李華の意識変革論（加藤）

る者、文をもつて業を講じ、他の蹊径無し。薦紳の倫、三台（三公のこと）を望むこと青天に登るが如し。公と河南の元徳秀・天水の閻仲璵は同歳に正鵠に中たれり。其の後、惠文（惠文冠という冠）を冠し、建礼（礼部のこと）に趨き、憲章・奏議は、与に名声俱う」〔唐故尚書工部員外郎贈礼部尚書王公神道碑銘并序〕と。

そんな元徳秀をこよなく愛した李華もまた魅力的な風貌の持ち主だった。独孤及「趙郡李公中集序」にはこう記される。

公の名は華、字は遐叔。趙郡の人。安邑令府君の第三子。質直にして和、純固にして明。曠達にして節有り。中行にして能く断ず。孝敬・忠廉なること、天機を根とす。親の喪を執りては、哀は神明に達す。其の職に任ぜられては績を釐（治）め、外は坦蕩（ゆつたりとしている様）なる若く、内は正性を持す。諫むるに顔を犯さず、義を見ては乃ち勇。善を挙げては惟だ及ばざるを懼る。務めて悪を去ること仇に復するが如し。朋友と交わりては、然諾（結んだ約束）はしっかり果たす意。天下に著す。其の偉詞・麗藻は、則ち和氣の余なり。学博くして識に余有り。才多くして体（本質）愈いよ迅し。述作する毎に、筆鋒より風生じ、聴く者耳駭（おどろ）けり。

その「孝敬・忠廉」は天性のものというから、そう真似のできぬ域にあったのだろう。(上司を)諫言するときは相手の立場をよく考え、善事を主張するときはわが身を振り返りつつ謙虚に行い、悪事には親の仇のようにきびしい。また友人をととても大切にすることも、世に知られるところである。まことに多才にして敏捷、また筆鋒は非常に速く鋭く、卓越した人間洞察力をもった一世の傑士だった。ゆえに、その生き方は少なからぬ人士に影響を与え、新しい歴史の奔流として仰がれていったのである。

ようやくいま万里の彼方から、時代の覚醒的先駆者―李華の猛々しい咆吼がよみがえってくるのを確認できたが、それはまた人知れぬ塵外の彷徨の道へと通じていく。その委細は別に論ずることとして、ひとまずここで筆を擱く。

注

- (1) 『立命館文学』第五九八号(清水凱夫教授退職記念論集 二〇〇七) 所収。
 (2) 仏教面では、日比宣正博士の学位論文『唐代天台学序説』の第二編「第三期時代の著作」第四章「止観大意」(山喜房佛書林 一九六六)が先駆的にしてかつ詳しい。李華の命により湛然がまとめた「止観大意」について、その制作時期や思想的特色などについて論じている。李華の年譜が未整備だった当時において、関連資料の博搜に成果をあげられた。
 また禅宗と李華の関係について言及したものとしては、柳田聖山『初期禅宗史書の研究』(禅文化研究所 一九六六)第三章「南宗の擡頭」が、先駆的かつ重要である。柳田は牛頭宗や文学面との関係についても広く論

究し、後学に与えた影響は甚大である。たとえば鈴木正弘「唐代中期の居士―李華を中心に」(『立正史学』六一 一九八七)、佐藤義寛「李華の釈教碑について」(『大谷学報』七五―二 一九九五)などがある。

文人李華の研究としては、神田喜一郎「梁肅年譜」(東方学会 創立二十五周年記念『東文学論集』一九七二)が、最も早くかつ重要である。神田は「蕭穎士・李華・独孤及・梁肅・呂温等の諸家が…、当時新しく起った学問や思想…、その第一は当時春秋の学問に三伝の外に一面を開いた啖助・趙匡・陸淳などの新経学派…、第二は当時新しく天台教学の復興を企てて多くの著述を遺した高僧荆溪湛然およびその一派と」深い関係を持っていたことに言及し、その後の中唐文学・思想研究に大きな影響を与えた。たとえば林田慎之助「韓愈における発憤著書の説」(『文学研究』七〇 九州大学 一九七三)、劉三富「李華の思想と文学」(『中国文学論集』四 九州大学 一九七四)はその早い反応を示す。林田はさらに「唐代古文運動の形成過程」(『日本中国学会報』二九 一九七七)を発表、その後のが国における同研究の基礎を作った。たとえば小野四平の「唐代古文の源流」(一九九〇・九一発表、後『韓愈と柳宗元―唐代古文研究序説』所収 汲古書院 一九九五)という、この方面に関する専論(百頁超)も生まれた。近年は、加藤敏「元徳秀の受容―李華・元結における元徳秀像について」(『千葉大学教育学部研究紀要』二 人文・社会科学四七 一九九九)等がある。

- (3) 最近『昆陵集』に関する初の校注本『昆陵集校注』(遼海出版社 二〇〇七)が、劉鵬・李桃校注、蒋寅審訂により刊行された。久しく看過されていた独孤及の著書を整理されたのは高く評価できる。ただ子細に見ていくと、「注釈」面は一層の充実が必要と感ぜられる。なお本文のこの引用文は、もとは「以冥寂歴思慮」となっているが「校勘」に「唐文粹」に「歴」の字無し」とあるのに従った。

- (4) 『中国文学の女性像』(石川忠久編 汲古書院 一九八二) 所収。
 (5) 屈光「盛唐李蕭古文集団及其与中唐韓愈集團の關係」(『文学遺産』一九八七―四期)、蕭淑貞「李遐叔及其作品研究」(国立台湾師範大学国文研究所

集刊三四号 一九九〇）などに、「正交論」への言及が見られるが、一（四行程度）でしかない。

- (6) 程千帆『唐代進士行卷与文学』（上海古籍出版社 一九八〇）。二〇〇八年、武漢大学出版社から復刊されている。なお松岡栄志・町田隆吉訳『唐代の科挙と文学』（凱風社 一九八六）として翻訳がある。

- (7) ただし徐松『登科記考』には種々の誤りがあり、拙論では『登科記考補正』（孟二冬補正 北京燕山出版社 二〇〇三）によって掲げる。進士の合格数は徐松の原文のまま。

- (8) 孫逖が張説の古文を継承したことについては、小野四平『韓愈と柳宗元』五二―五九頁を参照。

- (9) 河内昭円「李華年譜稿」（『真宗総合研究所紀要』十四 大谷大学 一九九六）に、『新唐書』が付伝する李観と韓愈が墓誌銘を書いた李観とは同一の人物であるが、それが李華の従子であるとは考えにくい。…二人の李観はおそらく同姓同名の別人であり、『新唐書』の理解に問題があるとしなければならぬ」（二二五頁）と疑念を述べておられる。韓愈の「李元賓墓銘」に記すのに従えば、李観の誕生は大暦四年（七六九）頃になる。しかし、李華の文章は「永泰二年四月叔父華序す」とある。永泰二年は大暦元年のことだから、この時李観は三年の差でまだ生まれていなかったことになる。ゆえに河内氏のように「別人」という解釈が出てくるのである。

なお（一）前稿で「ようやく年譜が作成されつつある段階である」として、河内氏のこの「年譜」を掲げたが、その後、それ以前に中国で幾種か同様のものが出ていたことを知ったので、ここに補足しておく。汪晩香「李華卒年考」（『湖北師範学院学報』一九八九二期）、陳鉄民「李華事迹考」（『文献』一九九〇―四期）、謝力「李華生平考略」（『唐代文学研究』廣西師範大学出版社 一九九〇）などがある。

- (10) 清水茂『唐宋八家文』上（朝日新聞社 一九六六）五〇八頁。

- (11) 士冠の儀については、蜂屋邦夫編『儀礼士冠疏』（東大東洋文研報告書汲古書院 一九八四）を参照。

- (12) 『周礼』秋官・司寇に「掌士の八成は…七は邦朋を為すと曰う」とある。

盛唐の復古論者・李華の意識変革論（加藤）

- (13) 松原朗『中国離別詩の成立』（研文出版 二〇〇三）を参照。

(14) 林田慎之助氏の「唐代古文運動の形成過程」（注（二））を発展させたのが、小野四平「唐代古文の源流」であることは前述の通りである。この中で、小野氏はその概略を、「武后期に登場した陳子昂や張説によって切りひらかれた文章表現の散文化への道すじは、精神的もしくは実践的に房琯や孫逖たちによって継承されたのである。また独自の立場からの元徳秀による影響も大きかった。さらに異なる形で蘇源明の支持も無視することができない。さまざまな流れがあつて、それが複雑にからまり合いながら、やがて天宝の作家たちが登場してきたのだと考えられる。天宝期の作家たちとしては、蕭穎士・李華・賈至・独孤及そして元結が知られている。彼等の仕事は、やがて梁肅を経て韓柳へとつづがれていく。」（十五頁、五九頁にも同様の記述あり）と述べられる。随所に詳細な人間相関図を浮かび上がらせており、その指摘に教えられることが少なくない。ただし、具体的な作品の読解はあまり取り上げられていない。

- (15) 最近、郭広偉校点『權徳輿詩文集』（上海古籍出版社 二〇〇八）が刊行され、權徳輿研究に便が得られることとなった。

Abstract

盛唐时期的复古论者・李华的意识变革论

加藤国安

唐开元、天宝年间的文人李华长期以来被视为唐代古文运动的先驱，研究亦多围绕其古文复兴主张的相关关系而展开。至于李华的作品内容及其为人秉性如何，却鲜有论及。由此，拙论第一章即以《哀节妇赋》为中心，论述李华不畏传统贞节观、具有强烈的正义感，探讨李华作为道德家的一面。第二、三两章，考察《正交论》所体现出的他对于正确交友的思考。在李华看来，即使科考学问优秀，倘若不能怀着信义之心与敬爱之情同人交往，政治上便难有很好的作为。他强调在政道荒废的危急状况之下，唯有勤勉修习道德之人，方能成为领袖。然而，他也感叹现实中当权派飞扬跋扈，少数派只能被欺压迫害。因此，他希望借由复兴古文来摆脱这种局面。于此，我们可以看出时代的先驱者李华在意识上的变革。第四章论及韩愈《原道》的先驱性作品《元鲁山墓碣铭并序》一文，关注李华对其心目中理想人格的代表，同时代人元德秀的记载，追溯其安于清贫、乐于道德的人生足迹，并论述这种高尚的道德人格观正是李华古文论的根本所在。基于以上的几点研究，自盛唐的复古论直至中唐韩愈、柳宗元等人的古文运动之间的线索，得以更加鲜明。